私の保育

―子どもたちから学んだもの―

野口智恵子

ある機会があって「自由あそびの場において、子どものあそびを育て発展させていくには教師はどのようなかかわり方をしたらよいか」と云う研究テーマに沿って、毎日の保育の実践例や記録を基に勉強することになった。

勉強不足で粗末な保育を研究資料として提供することに困惑したけれども、今、私たちが行なっている「あそびを大事にする保育」を（こうした保育を自由保育形態と呼んでるようですが勉強不足で確信がないので呼べない）、客観的な立場で研究会の方や、講師の先生の御助言を頂きながら保育の見直しをすることもよい機会ではないかと思い切ってみた。

研究会を重ねていく度に、日頃の保育の問題点や疑問などの悩みや不安が、先生方の示唆によって迷いがほぐれ、自分の保育の姿がよく見えるようになって来た。

あそびの保育の重要性と教師のあり方の認識を深め、これからの保育に勇気と希望が与えられたと共に、一層責任重大な仕事であることを自覚した。

子どもの心身の発達をうながす原動力は子ども自身の充分なあそびの体験から、子どものあそびの生活の中から生まれ育っていくものであること、そして、一人ひとりの子どもに個性があり、その個性を発揮しながら育っていく場は、充実した楽しいあそびの場であることを――五、六年前から始められた障害児教育から私たちは多くの事を学び教わることができた。障害児教育を始めて、まだ日は浅いけれども、キリスト教人間愛、平等観、治療的な観点から障害児であっても人間として、かけがえのない大切な一人であること、差別や偏見をしてはならないこと、一般児と障害児と共に生活し保育され、共存し合っていくことの重要性を主張し努力して来た。その様な生活の中で私たちは気がつかないでいたが、最も大切な事である。子どもをよく

知る基本的なものの見方、考え方を改めさせてくれた。障害児ばかりでなく一般児でもいろいろなハンディキャップを持った子どもが多くいることである。お友だちとなかなか遊べない子、粗暴な子、過保護な子、運動ぎらいな子とさまざまな問題を抱えている、そういった子どもたち一人ひとりを大事に保育し、どの子も心を開いて充実した楽しい、よろこびのある生活のできる場、保育をしなければいけない。

従来通りの一斉保育形態では、障害児の入る場は限られてしまうし、一般児であっても一定の枠の中で、みんなと一緒に活動し静かにしてお話を聞くことに努力のいることであるのに、障害児もみんなと一緒にすることが大事だからと云って興味も関心もないものを無理にしつけようとするあり方に、子どもの気持を無視した大きな誤りに気づき、何んとか他の方法で一緒に出来るものはないだろうかと悪戦苦闘の毎日であったが、障害児と一般児が、ごく自然にあそんでいる姿が見られるようになった。私たちのねがっていたことが子どもたちのあそびの中から芽ばえ育ち始めていることにおどろき、子どものすばらしさに感激した。

あまりの好ましい情景に、このままそっとしておいてあげたい。「もう！やめた！」と満足ゆくまでと——しかし一方では、そろそろ今日の中心活動の時間だと時計を睨みながら「お始まりよ」「おかたづけよ」と子どものあそびを簡単に止めさせてしまうことがしばしば。そんな時子どもから返ってくることばは「もうお始まり　つまんないなー」「もっと　あそびたいな」「また後であそぼう」といかにも残念で仕方ないという感じで、聞く度に胸が痛む。これでよいのかしらとカリキュラムとあそびの問題で悩み葛藤の日々であった。

子どもがあそびに熱中している時の眼の輝きはすばらしく美しい。からだいっぱい動かしてピチピチとあそび廻っている。あそびの楽しい雰囲気が回りの者にも伝わって来る。「おもしろそうだね　仲間に入れてね」とことばをかけたくなる。そんな時、教師も仲間に入れてもらってあそんでみると、意外に楽しいあそびが次から次へと変化していって少しも退屈しない。いろいろなものが見えて来る。

ある日、ワンパク坊のMとSの二人が、園庭の片隅にしゃがみ込んでかなりの時間、木片で地面の土をゴシゴシと削っている。粉の様な柔らかな少し湿りけのある砂をかき

集めておだんご作りに余念がない。「おもしろい」と声をかけると「うん　おもしろいよ　ほらこのおだんごすごく固いよ」「こわれないおだんご作っているんだよ」「先生もやってみたら」と誘われて、固い地面を削る。思った程楽な仕事ではない。なかなか根気のいる仕事だ。一度に多く出来ないが徐々にカタクリ粉の様な砂が溜って来る。柔らかくてシコシコして気持よい感触だ。おにぎりの要領でおだんご作りをするけれどもなかなか固まらない「先生の少しもできないよ」と困っていると「僕みたいにこうやるといいよ」と教えてくれる。「先生は、まだ始めたばかりだからね練習すればできるよ」と励ましのことばまでかけてくれた。何回か握っているうちに固まっていく微妙な感覚、コツを憶えておだんごが出来上ったときはうれしくて大事な宝物のような気がした。一生けんめいしていると女の子たちも仲間に入れてと寄って来てにぎやかなだんご作りになった。出来上ったのを数えてみるのも楽しいものだ。「もう　十一コも出来たよ　赤組さんみんなのを作ろうよ」とおだんご作りのあそびが続く。

子どもと向い合ってじっくりあそんだことで今まで想像もしなかった、ワンパク坊のMから思いやりのあるやさしいことばに接して改めてMの内面を知ることが出来て何よりよかった。Mも先生が一緒におだんご作りをしたことで満足したことだろう。心が打ち解け共感し合ったよろこびを素直に生活の場で現わしてくれるようになった。あそんだ後の気分のよさ、充実感を味わってみて、子どもたちがあそびに夢中になりおもしろくて仕方がない気持がよく理解出来るようになった。

楽しい経験を重ねていく中に、子どもたちのあそびの様相にも変化が見られるようになった。よろこんで登園して来る。一人ぼんやり立っている子が少くなくなった。あそびがダイナミックになった。自分の好きなあそびを見つけもくもくとあそんでいる。一人あそびを充分経験した子は気の合った仲間同志でグループあそびを楽しんでいる等々、何よりも元気な子ばかりになったことである。

子どものあそびの様子を見ていると、あそびには段階と云うか道筋、順序があって、そのあそびの流れに沿ってあそびが深められ発展されていくようだ。子どもたちはそれらを自然に身につけているようだ。生活に必要な知恵とかテクニック、あそび方、コツ、あそびのルールなど自分たちのあそびの経験から、自分の体ごとで習得しているよう

だ。一斉保育ではこの様なことはあまり見られなかったような気がする。一人ひとりの子が満足してあそびの生活を楽しみ友だち関係も深まり豊かになってきた。

しかし、その反面気がかりな問題も多く出て来て「あそびの理解」で教師間の意見の違いも見られる。子どもの自発的なあそびを大事にと子どもの自由なあそびのままでよいのだろうか。放任、マンネリ化、生活のきまりしつけ面の乱れ等々。

幼稚園の生活あそびは、家庭のあそびと同じであったり延長のようなものではなく、そこには教師の行き届いた教育的な配慮や環境見守りがなければならない。そして、子どもの自主性を尊重しながら望ましい豊かな経験を通じて豊かな人間として社会人として成長させていくことではないかと、真剣に「あそびの保育」を考えいろいろな本を読み勉強する。他の園の見学をしたりしたが、やはり自分たちの園に合ったものを自分たちの手で試行錯誤しながら見つけ出さなくてはと一斉的な保育形態から脱皮しながら、徐々に、子どものあそびの状態によって日課の枠が崩されていく週の一日を思い切りあそぶ日とした試みが二日三日と必要に応じて増して行き現在では殆んどあそびの保育となった。

あそびの時間の延長ばかりでなく、人生の基礎を育てる大切な幼児期を充実した生活経験をさせるべく環境づくりを大事にと園長先生の手づくりの遊具、ままごと小屋、体力づくりのための丸太の遊具が次々に園庭に作られる。にわとり、あひる、うさぎの放し飼いと豊かな生活経験をさせてあげたい。特に現代では野趣的なあそびの少ない子どもたちに経験させたい、のねがいを持って努力改善されてきたが、もっと大切なことは、将来ある子に接する教師の態度あり方が問題である。

一人ひとりの個性をよく知りその子の可能性を信じて大切に保育していくことであり、たえず活動し成長していく子どもたちをよく見つめねがいを持ってその場に合った配慮や手助けのできるよう一層の努力が必要である。特に先入観や色眼鏡で子どもを見ないで正しく理解するようにしたい。保育年数ばかり重ねた年配者の私は、新鮮な気持で子どもに接することを心がけたい。そして、子どもとたくさんあそぶことをしよう。その中で子どものあそびの夢を見つけ大きく育てよう。一人ひとりの子から考え出される一つ一つによく耳を傾け、大切に取り上げながら、お友だ

ちみんなが力を発揮して、夢を育てあげていこうとする雰囲気を大事にし、どの子も充実したよろこびのある生活をしたい。友だちを大事にする思いやりのある明かるい子どもたちであってほしいとねがいを持って始まった今年の四月、入園して間もない頃子どものあそびから始まった「オオカミごっこ」のあそびが半年近くも子どもたちの大好きなあそびとして、毎日といっていい程あそび継がれたものはない。今でも、時おり、「オオカミごっこしようよ」と口に出る程である。子どもと教師が一緒になって思い切りあそんだあの楽しさ、盛り上りを、充実感を、互いに共感し合ったあの味わいを忘れがたく一つの生き甲斐として求めつづけているのかもしれない。

入園したばかりの幼稚園は泣く子や跳ね回る子とおちつかない日々、ある日、園庭のブランコを基地にして四歳児の子が五六人集まってごちゃごちゃしたあそびを始めた、その仲間の中に新入園児も加わってあそんでいる。

「おや　今朝はめずらしく仲よくあそんでいるな」　そのままうまくあそんでくれるといいがなと祈る気持でしばらく様子を見ていた。一人の子が教師に気づいて、

「オオカミごっこしているの」

「先生も入って」

「Yちゃんがオオカミなんだよ」

と、あそびの説明をしてくれた。

「先生はこやぎさんになろうと」

と仲間に入れてもらって「オオカミごっこ」が始まったが、先ず、子ども同志のあそびの時には、男の子の「ウォー」の一声で「キャー」と女の子が喚声をあげて逃げ回る単純なものだったのに、Y児がオオカミで、小やぎでと役がはっきりしたことであそびの雰囲気が変わって、どうやら「七ひきのこやぎ」のようなあそびになった。

Y児「トントン、お母さんだよ」

小やぎ「足を見せて」

Y児「ちがうよ　始めは手を見るんだよ」

小やぎ「あゝそうか　手をみせて！」

とそんなやり取りをしながらあそびが展開されていった。子どもたちから、

「今度　先生がオオカミになって！」

「よーし　先生のオオカミはこわいぞ」

といいながら、そうだ、こんなにもみんながよろこんであそんでいる。クラスのあそびとして「七ひきのこやぎ」を

取り上げてみようかと即座にグリム童話の「オオカミと七ひきのこやぎ」のことばを思い出し、あそびに取り入れてみると、子どもたちはこやぎになり切って乗って来る。こやぎを呑み込んだオオカミのお腹を切る真似をして、本物の石を本気になって詰め込まれてはお手上げ「まいったー」子どもたちは「オオカミ死んだ死んだ」とよろこびの歓声をあげる。メタメタにされたけれども夢中であそび、みんな本当に楽しかった満足しきった顔々ばかりだった。

一息する間もなく元気な子たちは「七ひきのこやぎの絵本読んでー」「桃組さんの時に読んでもらったことあるよ」と急き立てる。何んとエネルギッシュな子どもたちだろう。みんなで今度は図書室へとぞろぞろと行き、フェリス・ホフマンの「オオカミと七ひきのこやぎ」の絵本を読み聞かせをする。子どもたちは、眼を輝やかせ一心に聞き入っている。みんなの心が一つになってあそぶこと、仕事をすることのすばらしさ、よろこびをかみしめながら、お話を聞きながらも、子どもたちの心の中には、七ひきのこやぎごっこのイメージ化が深まっていったのだろうか。

「お面つけて、やろうよ」

「わたしは　赤ちゃんやぎになるよ」

「わたしは　お母さんやぎになるよ」

「わたしは　一番目のお姉さんやぎね」

と、夢はぐんぐんと力強くふくらみ高まっていく。子どもたちの創造力のすばらしさに圧倒されそうだ。子どもの内面から泉のように湧いて出るイメージを上手にコントロールしていく。子どもたちと話し合い納得し合いながら、手順を考え一つ一つ着実におさえ習得させていくことが教師のかかわり方ではないだろうか。子どもの主体性を尊重し教師のねがいもそこにからみ合せながら共に高め合い育て合っていくものではいなだろうか。

なおこの「オオカミと七ひきのこやぎごっこ」のあそびはいろいろなあそびに派生しながら発展していった。その度に、教師のかかわり方について深く考える場であったり、子どもから学ぶことも多くあって勉強することが出来た。これからも子どもたちと心で結びついた生活が多くできるように子どもと共に見つけ出していきたい。

その時々を、精いっぱい生活するよろこびを経験した子どもたちは、大きく、たくましく、自分の力で力強く、そして、人間らしく豊かな心を忘れずに生きていってほしいとねがいをこめて。

（長野・松本聖十字幼稚園）